

## 教育者としての寺阪昭信先生

志 村 喬

### I はじめに

1979年(昭和54年)4月に東京都立大学理学部地理学科に入学した私は、第2学年途中までは勉強しないどころか殆ど大学へ行かない不真面目な学生だった。そんな学生に、自然地理学以外の地理学も面白いと感じさせてくれたのが、当時のグレコ会の中心メンバーであった中村和郎先生と寺阪昭信先生による地理学の最先端にかかわる授業です。

中村和郎先生については、「地理教員になって始まった中村和郎先生との交流・思い出」(志村, 2022)に記させていただいたため、本稿では学部生時代から指導教員として大変お世話になった寺阪昭信先生について、私の先生という側面から述べます。本号掲載「中村和郎先生と寺阪昭信先生を偲んで—2023年春グレコ会談話録—」と重複する内容もありますが、ご海容願います。

### II 寺阪昭信先生の授業・指導

#### 1. 地理学科『履修の手引(授業要目)』から

私が学部生であった1979~1982年度までの期間、寺阪先生が中心になって開講された授業及びその概要を、手元にある地理学科『履修の手引(授業要目)』から記すと次になる(〈 〉内は筆者の学年)。

1979年(S54年)〈学部1年〉

人文地理学特殊講義I(昼・前期)

社会地理学の基本的問題、生産と交換=流通の社会組織の空間的評価・地域システムを検討。

地理学ゼミナールVII(昼・前期)

テキストは、A.G.フランク著(1979)『世界資本主義と低開発』柘植書房。

1980年(S55年)〈学部2年〉

地理学ゼミナールVI(夜・後期)

テキストは、北村・寺阪編(1979)『流通・情報の地域構造』大明堂。

1981年(S56年)〈学部3年〉

人文地理学概説(渡辺・寺阪, 昼・夜, 通年)

寺阪先生担当の後期はE.ホールの『かくれた次元』など行動地理学の内容。

地理学調査法III(寺阪・杉浦, 集中)

北海道十勝地方への2月の大巡検。参加学生は、人文系の学部3年生、五十嵐・大沼・櫛谷・篠崎・志村の5人。

1982年(S57年)〈学部4年〉

地理学ゼミナール(昼・後期)

テキストは、D.ハーヴェイ著、竹内・松本訳(1980)『都市と社会的不平等』日本ブリタニカ。社会地理学(夜・後期)

社会地理学の基本問題、具体的な主要事例は、市場=空間システムの空間構造および第三世界の都市(化)。

このうち、私が履修したのは学部3年次の授業と4年次のゼミナールであった。それぞれ当時の人文地理学研究のフロンティアを扱った内容で興味深く、渡辺良雄先生の「都市地理学」と相まって、私の人文地理学研究指向の基盤を形成するものであった。とりわけ、「人文地理学概説」は空間認知からはじまる行動地理学の魅力を、「地理学ゼミナール」は地理学の革命を計量化・論理実証主義地理学化と信じていた私の人文地理学観へアポリアを芽生えさせるもので、理解は全く追いつかなかったが、知的刺激に満ち、大学院進学を促した。

#### 2. 理学研究科(修士課程)での授業・指導

1983年4月、理学研究科地理学専攻(修士課程)にどうにか進学を許され、寺阪先生に主指導教員となっていたが、学部同様に真面目に研究に取り組んだとは言い難い状況であった。そんな私がとりわけ苦勞したのが、「一橋大学の竹内啓一先生のところへ通って授業を1つ受けなさい」との振替授業体験である。結果、同期の櫛谷さん・水野さんと一緒に週1回、竹内先生の英語文献講読授業に通うことになった。英語ができない私にとってこれは大変な授業で、竹内先生に挨拶した帰路、書店に直行し研究社の『英和大辞典』を購入した、しかし、1回の授業で複数の論文を読む進度には全くついて行けず、竹内研究室のある一橋大学東校舎へ情けない暗い気持ちで毎回通った。振り返ると、都立大以外の広い世界の学界活動や学修水準を身にしみて知る貴

重な体験であった。寺阪先生からは修了後、「都立大の院生は教室が大きくて恵まれているせいか、外へ目を向けることがない。もっと他流試合をすべき」との考えからなされたといひ、納得した。

### Ⅲ 寺阪先生との修了後の交流

#### 1. 学校教員への教育的配慮

3 月半ばまで採用通知が届かない私に対して、東京での就職について寺阪先生からはご心配いただいたが、どうか 1985 年に新潟県の高校へ採用された。高校教員として一生勤めると考えていたが、採用年度末の夜に、修士論文を学会誌投稿しないのならば『理論地理学ノート』に投稿しなさいとの電話が寺阪先生からあった。予想外の電話だったが、嬉しかったことを、その日の夜の寒さとともによく覚えている。拙論(志村, 1987)にもかかわらず翌年の『人文地理』学界展望では、伊東理先生に意欲的な好論文として評価され、先生の電話に感謝した。

その後、私の関心は商業・行動地理学から、地理教育へと徐々に移行したが、寺阪先生は様々な場面で有為な情報と機会を提供くださった。同時に、結婚式へのご来歴、家族ぐるみで自宅訪問など、公私にわたる交流を通して教育と研究を励ましてくださった。

#### 2. 大学教員としての教示

2002 年(平成 14 年)、大学教員に採用されたことをお伝えすると、大学(人)というこれまで未体験の世界に関してもご教示をうけることになった。ある場面で、寺阪先生は「大学といっても、教育もある。学生をそれなりに育てて卒業させるのも、教育者としての仕事だからね。」と話された。卒業・修了後も寺阪先生を慕う知人は多いが、その由を象徴する発言で、大学教員としての私の現在の在り方に大きな影響を与えている。

なお、大学人になった直後の寺阪先生との思い出に、渡辺良雄先生の墓参がある。修了時に人文地理学研究室を主宰されていた渡辺良雄先生は、私が就職した年度末にお亡くなりになった。渡辺先生には、修士論文作成・就職で大変ご心配をおかけしたため、大学就職を機にご報告したく、寺阪先生へ墓地についておたずねした。すると、寺阪先生も同行くださるとのこと。結果、2003 年 7 月 20 日、西多摩霊園へ一緒に墓参することができた。

大学教員になって 4 年後の 2006 年、新潟市で開

催された東北地理学会秋季学術大会のシンポジウム「防災をめぐる地理学研究と地理教育の連携—地理学・地理教育の社会的貢献—」を、オーガナイザーとして企画・運営した。寺阪先生は東京から参加され、終了後「君は都立大時代とは異なる専攻分野で就職したが、違う分野で世界を自ら広げ、シンポジウムを主宰するようになったんだね」と評価してくださった。教育においては、学習者に対する勇気づけ・励ましが大切だが、寺阪先生の根底にある教育者としての哲学を改めて意識する言葉であった。

### Ⅳ おわりに—寺阪先生の佐々木高明先生への想い—

2013 年頃、寺阪先生と東京でお会いした時、京大大学時代にお世話になった佐々木高明先生が、著作集を出したいとお考えにもかかわらず出版社が見つからないので、お手伝いしていると話された。その時は経緯が分からなかったが、後日ご恵贈いただいた書籍(佐々木, 2013)における寺阪先生の「あとがき」から、佐々木先生とのご関係が理解できた。とりわけ最後に記された「先生との出会いにより、なんとか研究者として歩めたことと、これまでに大変お世話になったことに対する感謝の気持ちで、著作集の出版をお手伝いできることの喜びを感じつつ作業を進めてきた」(p.578)には、佐々木先生への寺阪先生の想いが凝縮されている。寺阪先生の教育哲学は、このようなご自身の被教育体験から醸成されたのだと思う。

寺阪昭信先生は私にとって、フロンティア研究者であるだけでなく、教育者であり先生でした。

先生、安らかにご永眠下さい。

(上越教育大学)

#### 注

1)お嬢さんが装丁を担当することを嬉しそうにお話しされたことが印象に残っている。

#### 文 献

- 佐々木高明 (2013):『日本文化の源流を探る』海青社, 580p.  
志村 喬 (1987):『スーパーマーケットチェーンの多店舗展開に関する企業行動論的考察—茨城県における中規模スーパーを例として』理論地理学ノート, 5, 27-42  
志村 喬 (2022):『地理教員になって始まった中村和郎先生との交流・思い出』『中村和郎先生を偲んで』地理学サロン, 43-46.